名古屋学院大学論集　社会科学篇　第52巻　第3号　pp. 175–180

〔資料〕

エルトン・メイヨーとピエール・ジャネ　その2

――強迫観念的思考――

髙　木　直　人

名古屋学院大学商学部

要　旨

メイヨーが最後に出版した著書である『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet（ピエール・ジャネの心理学に関する研究ノート）』[1] の整理を進めるにしたがって，はっきりとさせておく必要があると考えたことがあった。それは，メイヨーは，なぜ，ジャネの「強迫観念的思考（Obsessive Thinking）」に関心を持つようになったのかである。メイヨーが心理学に関心を持っていたことは，彼のオーストラリア時代の研究結果[2] からも理解できる。

ではなぜ，メイヨーが，特にジャネの心理学に最も関心を持ち，彼の人生で最後の著書として『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』を出版したのかを，整理しておかなければならないと考え，本稿においてまとめてみた。

キーワード：精神病理学，ヒステリー，強迫観念的思考

Elton Mayo and Pierre Janet（Ⅱ）

――Obsessive Thinking――

Naohito TAKAGI

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

発行日　2016年1月31日

1．序

『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』の第2章に「Hysteria And Hypnosis（ヒステリーと催眠）」[3] がある。このタイトルからも理解できるが，ヒステリーと催眠について，メイヨーの考え方が少し詳しく書かれている。しかしこの著書は，「ジャネの業績に関する研究ノートである。決して，ジャネが長年研究を行ってきた臨床的研究を報告したものではない。ジャネの業績がすべてフランス語で書かれている。今後，ジャネの業績をフランス語の原点で読もうと考えている者にも，英語で書かれたこの著書をガイダンス的に利用してくれることを意図して作成した。また，医学生や精神医学の問題に関心のある学生のために，さらには，同僚の研究者のために作成した。特に，特定の状況の研究において，ジャネの考え方が最も有益である。」[4] との考えのもと作成されていることを忘れてはならない。

今回は，まず，この第2章の「Hysteria And Hypnosis」を理解するための基礎資料として，ジャネがヒステリーについて，どのように考えていたのかを整理[5] し，ヒステリーに関して19世紀後半にはどのように考えられていたのかを紹介しながら，ジャネとヒステリーの関係について考えてみる。

2．ヒステリーと強迫観念的思考

19世紀後半のヨーロッパでは，ヒステリー[6] は原因不明の病気とされていた。それは，脳に何の異常もない器質性の病気（からだの組織である筋肉群や骨格などがすでに変形あるいは破壊されてしまっている状態，又は著しい内臓の機能低下などを指す）ではなく，心因性の病気（心理的なことが原因であり，診察・検査を行っても異常がないことを指す）だと考えられていたからである。しかも，根本的な治療法はまだなかった。

そのような中でも，催眠療法が最も有効な治療法として，ヒステリーの研究で有名だった神経学者であるシャルコー[7] は，パリでヒステリー患者に催眠をかけ，ヒステリー症状が現れたり消えたりする様子を一般公開していたといわれている。

そして，知られた事実として，パリのサルペトリエール病院でヒステリー患者の治療にジャネとフロイトは参加し，シャルコーから精神病理学を学んでいる。

その内容が，みすず書房のホームページで，ジャネの著書である『心理学的自動症』[8] を紹介する文書に，「19世紀末，P・ジャネはフロイトと同じくパリのサルペトリエール病院で，ヒステリー患者の治療にあたった。当時隆盛していたヒステリーはまさに近代を象徴する病で，その病の把握を通して，精神医学は成立したのである。ジャネはフロイトと同じ場所から出発し，同じ時期に「無意識」を発見した。だが二人はことなる道を歩んだ。フロイトの思考は近代における人間の変化を捉え，文化にまで射程を広げたのに対し，ジャネは徹底して臨床にとどまり，力動精神医学を確立した。」[9] と書かれている。

ジャネは，シャルコーのもとでの臨床研修を経て，医学博士を取得し，「精神病学を通じて心

理学を，心理学を通じて精神病理学を実り豊かなものにしようとし，心理療法に健全な心理学的基礎を与えようと努力した臨床心理学者の最初の一人である」[10] といわれている。また，フロイトも，シャルコーのもとで，ヒステリー患者の治療にあたっていたのである。それゆえに，精神病理学のフランス学派の創始者であり代表者としてジャネと，ドイツ学派のの創始者であり代表者としてフロイトとは，よく対立されている。

それは，「ジャネとフロイトの間には，理論的にも，個人的にも確執があったからであろう。特にフロイトの展開した無意識が認知されるようになると，自然とジャネはフロイトの影に隠れて忘却された」[11] のであるといわれている。

しかし，両者は対立しているように思われがちであるが，それほどに考え方がことなるのであろうか。このことに関しては，故櫻井信行教授が，『人間関係と経営者』で，「両者の立場はまったくことなっているようであるけれども，基本的には相調和することができないものではなく，むしろ補足的である，とメーヨーはみている」[12] と説明をされている。さらに，「ジャネーは主として強迫観念的思考のしかたに興味を持っているのに対して，フロイドは強迫観念症患者が何を考えているのか，またどうしてそれを考えるようになったのかに興味をもっている」[13] との説明をされている。

また，故櫻井信行教授によると，メイヨーは，ジャネの「強迫観念症患者が最もはげしい困難に直面した瞬間に，その思考過程を統制することができなくなる技術的欠陥を詳細に説明」[14] することに関心があった。だが，メイヨーは，フロイトの「足りない考えとかひねくれた考えや強制的儀式の発展を，不幸な幼時の環境と病的先入観にまでさかのぼって説明」[15] することには関心がなかったようである。

そして故櫻井信行教授はさらに，ジャネは「強迫観念の主な特徴は現在の状況，特に社会的状況に対して適切に反応することがまったく不可能であることにある」[16] と主張していると述べている。

上述の故櫻井信行教授によるジャネのヒステリーと強迫観念的思考に関する説明からも，メイヨーは，フロイトではなく，ジャネの考え方が自分には適していると思っていたのであろう。だからこそ，ジャネの強迫観念的思考を研究し，メイヨーが参加したアメリカでの産業調査に用いたのであろう。

3．メイヨーと心理学

メイヨーは，いろいろな職を経験しながら，1907年（30歳）にアデレート大学に再入学している。再入学のきっかけは，姉の紹介で出会った，アデレート大学の教授の一人であったウイリアム・ミッチェルと，メイヨーはビジネスライフの不満について議論し，彼がが質問した問題に対し適確に答えられたのは，ミッチェル一人だけであった。その議論をきっかけに，メイヨーは，アデレード大学で，ミッチェルの指導のもとに心理学，社会学や哲学の勉強をやり直そうと決意し，大学に再入学している。

特に，「心理学」の講義では，ウイリアム・ミッチェル自身の本である『精神の構造と成長』[17]をもとに授業されていた。この『精神の構造と成長』とい本は，メイヨーの知的成長に重要な役割を果たしたと考えられる。

アデレード大学で，メイヨーは，最も関心のあった心理学の研究に従事し，1910年（33歳）に最優秀の成績で卒業している。この時代にメイヨーが研究した心理学が，後の研究に大きな影響を与えている。この時すでに，ジャネの心理学に関してもかなりの研究を行っていたのであろう。

メイヨーは，最初の研究的地位を1911年にクイーンズランド大学の論理学，倫理学，形而上学，心理学の講師として職を得ている。その後，1919年，クイーンズランド大学に新設された哲学講座の最初の教授として就任している。この状況からも，メイヨーの哲学に関する知識もかなり高かったと考えられる。

メイヨーは，クイーンズランド大学在職中の第一次大戦末期に，「戦闘神経症（shell shock）」[18]に陥った兵隊の精神医学治療法プログラムを企画実施し大きな成果を上げている。メイヨーはこの時の研究と経験をいかし，広く産業における人々の「環境不適応（malajustment）」の問題に関心を向けることとなる。

特に，メイヨーが関心を持っていた，2種類の社会組織の原理である「確立された社会（Established Society）」[19]と「適応的社会（Adaptive Society）」[20]については，この時代から高い関心を持っていた。

そのことからも，メイヨーが心理学の研究をはじめた時代から，特にジャネの強迫観念的思考に関心を持っていたことに間違いはないであろう。

4．結び

メイヨーが，特にジャネの心理学に最も関心を持ち，彼の人生で最後の著書として『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』を出版した理由が少し見えてきたように思われる。

それは，メイヨーが行ってきた産業調査を進めるうえで，ジャネの心理学は最も大切なものであったからである。そのような理由から，メイヨーが，産業調査に参加したメンバーに，ジャネの心理学を精読させていることからも理解できる。また，産業調査に参加したメンバーは，ジャネの心理学を精読することによって，産業調査を進めるうえでの新たな考えが生まれたことも事実であろう。

だからこそ，産業調査を行った後に，メイヨーはジャネの心理学の重要性を理解してもらうためにガイドブックが必要と考えたのであろう。また，当時は，ジャネの心理学は，フランス語で書かれていた著書だけが存在していたことも一つの理由であろう。

産業調査に参加したメンバーは，メイヨーと共にジャネの心理学を精読することができた。しかし，これから，ジャネの心理学を学ぼうとする若手の研究者たちには，個人でジャネの心理学を学べるためのガイドブックが必要と考え，英語で書かれた『Some Notes on the Psychology of Pierre Janet』を出版したのであろう。

謝辞　この原稿を作成するに，多くの方々にご協力を頂きましたことに御礼申し上げます。また，この原稿は，2015年度名古屋学院大学研究奨励金の成果の一部で作成することができました。

註

1） Mayo. G. E, “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, Boston, Harvard Business School, 1948.
この著書に関しては，2015年2月に出版会社の「Routledge Revivals」より，復刻版が出版されている。本原稿では，この復刻版を利用している。ただし，タイトルが変更されて，『*The Psychology of Pierre Janet*』となっている。

2） 髙木直人著「メイヨーの生涯と業績（その1）」『呉大学短期大学部紀要』第9号，2005年。
髙木直人著「メイヨーの生涯と業績（その2）」『呉大学短期大学部紀要』第10号，2007年。

3） Mayo. G. E, “*Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*”, pp24–46.

4） *Ibed*., p. ⅶ.

5） ジャネの「強迫観念的思考」に関しては，故櫻井信行教授の研究成果を利用させていただいている。また，桜井教授は，筆者が用いる「メイヨー」を「メーヨー」と，「ジャネ」は「ジャネー」と，「フロイト」を「フロイド」とされているので，引用部分については，原文の表現を使用している。

6） エティエンヌ・トリヤ著，安田一郎・横倉れい訳『ヒステリーの歴史』青土社，1998年。
ヒステリーの歴史に関しては，この著書を参照にしていただきたい。
特にこの著書では，第5・6章では，シャルコーとヒステリーに関して書かれており，第9章には，ジャネとヒステリーに関して書かれている。

7） シャルコーとは，フランスの神経病学者である。シャルコーは，1860～93年，パリ大学病理解剖学教授に就任している。また，1862年からサルペトリエール病院にも勤務している。1882年に，新設の神経病学教室の教授となっている。同病院でヒステリーおよび催眠術を神経科学の立場から研究し，ヒステリーの症候を明確にした人物とされている。

8） P・ジャネ著，松本雅彦訳『心理学的自動症　人間行動の低次の諸形式に関する実験心理学試論』みすず書房，2013年。

9） みすず書房のホームページからそのまま文書を抜き出している。
http://www.msz.co.jp/news/topics/07758.htmlを参照して欲しい。

10）山下晴彦監修『誠信　心理学辞典　新版』誠信書房，2014年。

11）この部分も，みすず書房のホームページからそのまま文書を抜き出している。
http://www.msz.co.jp/news/topics/07758.htmlを参照して欲しい。

12）13）桜井信行著『新版人間関係と経営者』経林書房，1971年，P142。

14）15）16）同上書，P143。

17）Trahair. Richard. C. S, “*The Humanist Temper: The Life and Work of Elton mayo*”, Transaction, Inc. , 1984, p53.
この著書に，1907年に，ミッチェルの書いた著書，『精神の構造と成長（*Structure and Growth of the Mind*）』が公刊されているとある。

18）第一次世界大戦中は，心的外傷後ストレス症候群（Post traumatic stress disorder）を，shell shock（シェルショック）と呼び，第二次世界大戦中は，戦争神経症と呼んでいた。
また，当時，外傷的な出来事に関する，耐え難い情動反応が一種の変成意識をひきおこし，この変成意

識がヒステリー症状を生んでいるという結論だし，ジャネはこれを「解離」と呼び，フロイトは「二重意識」と呼んでいる。

19)「確立された社会（Established Society)」を簡単に説明する方法として，子供の社会を考えて欲しい。1965年前後のころは，まだ，ガキ大将を中心に子供の社会が形成されていた。そこで子供たちは，子供だけの社会を形成し社会経験を積んでいた。そして徐々に大人になっていた社会のことである。

20)「適応的社会（Adaptive Society)」を簡単に説明する方法として，上述と同じように子供の社会を考えて欲しい。共働きの核家族の増加に伴い，家庭や地域社会が崩壊する一方で，子供の社会からもガキ大将が消えていった。受験勉強に追われる子供と，一人でゲーム遊をする子供たちが増えている。そのような子供たちが大人になっていく社会のことである。

参考文献

F. J. Roethlisberger and William. J. Dickson, “*Management and the Worker*”, New York: John Wily&Sons, 1939.

Mayo, G. E, “*The Human Problems of an Industrial civilization*”, New york, The Macmillan ＆ Co., 1933.

村本栄一訳『新訳産業文明における人間問題』日本能率協会，1967年。

Mayo. G. E, “*The Social Problems of an Industrial civilization*”, Boston, Harvard Business School, 1945.

藤田敬三・名和統一訳『アメリカ文明と労働者』大阪商科大学経済研究会，有斐閣，1951年。

Mayo. G. E, “*The Political Problems of an Industrial Civilization*”, Boston, Harvard Business School, 1947.

進藤勝美著『ホーソン・リサーチと人間関係論』産業能率短期大学出版部，1978年。

木村敏著『人と人との間　精神病理学的日本論』弘文堂，1972年。